

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02576

研究課題名(和文)近代ドイツ文学における都市ベルリンの記述可能性

研究課題名(英文) Descriptability of the city Berlin in modern German literature

研究代表者

岡本 和子 (Okamoto, Kazuko)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：50407649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ロンドンやパリとは違い、民文化の象徴としての意味をながらもたなかった都市ベルリンが、どのように文学に記述されていったのか、また、文学はどのようなベルリン像を構築しているのかを、グツコー、フォンターネ、グルクの作品を主たる分析対象として、明らかにした。ベルリンが文学の中心地となり始めた19世紀初頭の作家グツコーは、幼年時代を描くという方法で新都市ベルリンを文学に描こうと試み、19世紀後半には、フォンターネが都市を、封建的な閉鎖空間から外界へ向かう道として描いた。20世紀には、都市をもはや理想と現実との調和の場としてではなく、過酷な現実として描くグルクのような作家が登場する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツにおいてもベルリン文学の研究はまだ包括的には研究されておらず、個別作家についてのモノグラフィーがその大半を占める。本研究は、19世紀初めから20世紀までを射程に入れてベルリン文学の変遷を捉えようとする試みであり、今後、都市と文学という問題をドイツ文学から考察する際に大きな見取り図を提示するものである。また、推理小説風の舞台装置や非合理的なものを小説のなかに組み込むという斬新な手法を用いたグルクという作家は、ドイツにおいてもいまだ全集の刊行には至っていない。本研究が、その都市記述の先駆性を指摘することによって、本作家が都市文学の作家としてより注目されることが期待される。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to clarify how the city of Berlin was described in literature and what kind of city image could be constructed from the city described in literature. Unlike Paris or London, which have characteristics that represent national culture, Berlin, a late developed city, could not become a subject of literature until the 19th century. In the early 19th century, when Berlin began to become the center of literature, author Gutzkow attempted to portray a new city, Berlin, in a form of portrate of his own childhood. In the latter half of the 19th century, Fontane portrayed the city as a road from a feudal closed space to the outside world. After World War I, Berlin is increasingly described from inside and this Berlin is a place where more harsh reality than ideal is reflected. Writers like Gurk calmly described the irrationality of the city.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ベルリン 文学 フォンターネ グルク グツコー ベンヤミン 近代 都市

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

応募者は本研究を開始するまでに、言語および芸術において「子ども」はいかなる意味をもっているか、という関心から、「ドイツ・モデルネ文学における幼年時代の記述可能性」という研究テーマに沿って研究を進めてきた。そこで明らかになったのは、ドイツ近代文学の幼年時代の記述においては、「子どもの言語獲得」というモチーフが重要な位置を占めているということであった。子どもとは「言語をもたない状態と言語獲得との境界上にある存在」であり、幼年時代を文学作品として描くとは、いまだ言語化されていない「非言語的な生の歴史」を記述する試みなのである。

幼年時代の記述は歴史記述の一形式であるとの認識をもってドイツ近代文学における幼年時代の記述を読み直してみると、そこには都市ベルリンの記述に通底する部分が少なくないことがわかる(グラスプレナー、グツコウ、フォンターネ、ベンヤミン)。ヨーロッパの都市としては後発の都市であるベルリンは、ドイツ国家の形成と歩みをともし、19世紀から20世紀初頭にかけて、一領邦国家の王都からドイツ帝国の首都へ、さらにヴァイマル共和国の首都へと、大きな変貌を遂げる過渡期にあり、この意味で近代のベルリンは、いわば都市としての幼年時代にあったと言える。ベルリンを描いた文学作品は少なからずあるものの、それらの作品はこれまでベルリン文学としては体系的に研究されてこなかった。その最大の理由は、ベルリンという都市が、ロンドンやパリとは違って、国民文化を代表する性格をもつ都市でもなければ、憧れや愛着を抱かれる都市でもなく、むしろ魅力に乏しい殺伐とした町と見なされていたことにあると思われた。そのため本研究では、単独で見ると完成度が高いとは言えないために、これまであまり研究されてこなかったベルリン文学を、それぞれの時代における都市ベルリンの自己記述として包括的に分析することによって、これまでに発見されていないベルリン像を浮かび上げさせることを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究は、都市を「いまだ書かれざる歴史のトポス」と見なし、ベルリンを対象として、都市がどのように文学における記述を見出してゆくのか、また、文学に描かれた都市からどのような都市像が構築しうるかを明らかにすることを目的とした。ヨーロッパの都市としては後発であるベルリンは、19世紀から20世紀初めにかけて、領邦国家の一王都からドイツ帝国の首都へと発展してゆく過渡期にあった。その過渡的な性格ゆえに、都市ベルリンの記述方法は模索され続け、個々のベルリン文学も完成度が高いとは言えない。本研究では、19世紀前半、19世紀後半、20世紀初頭それぞれの時代におけるベルリン文学を包括的に扱い、都市ベルリンが獲得した記述のあり方の変化、文学的記述のなかに浮かび上がるベルリン像の変転を明らかにしようと試みた。

### 3. 研究の方法

本研究は主として文献の講読とその分析によって進められた。地図関連の資料や19世紀ベルリン文学に関する資料は、冊子体となっていない新聞掲載記事等の形のものや未公開資料も多く存在するため、ベルリンの国立図書館および芸術アカデミー内のアーカイヴ資料での資料収集を行った。

### 4. 研究成果

本研究では、ベルリンという都市がどのように文学に記述されていったのか、また、文学に描かれた都市からどのような都市像が構築しうるかを明らかにしようと試みた。ヨーロッパの都市としては後発であるベルリンは、国民文化を代表する性格をもつパリやロンドンとは違って、19世紀まで文学の主題になることはほとんどなかった。ベルリンが本格的な文学活動の拠点になり始めるのは19世紀に入ってからであり、それはちょうど、出版・新聞発行といった書籍メディアが興隆し始める時期と重なった。

本研究が初期のベルリン文学として注目したのは、ベルリン生まれのグツコー(1811-1878)の作品(『わたしの幼年時代』)である。ここでは、みずからの幼年時代とベルリンが未熟な都市として出発しつつあることが重ね合わせて描かれている。都市記述の独自の様式がまだないなか、幼年時代の記述が都市記述の方法として模索されたことは必然的だったと言える。この時代の他の作家たちによるベルリン記述の試みの多くは、新聞や雑誌の文芸欄に笑話のような散発的な形で発表されるだけで、ベルリンが文学のテーマとして確立されるには至っていなかった。

本研究が本格的なベルリン文学の始まりとして注目したのはフォンターネ(1819 - 1898)のとくに晩年の長篇小説である。ここでは、人びとの家庭生活のなかに都市の勃興と重なる社会構造の転換が描かれているが、都市はとりわけ、閉鎖的・封建的な空間から外の世界へと出てゆくための「道」として描かれている。とくにベルリンは、たんなる一都市というよりは、さらなる外(外国)へと通じる空間として描かれていることが特徴的である。

第一次世界大戦後になると、グルク(1880-1953)の作品に見られるように、ベルリンはより内部から描かれるようになる。20世紀に入ってベルリンは、都市像を理想と調和させようとする意図のもとに描かれるのではなく、負の側面も含めて冷徹な記述の対象となっていく。

ドイツにおいても、ベルリン文学の研究はまだ端緒についたばかりであり、個別作家についてモノグラフィーがその大半を占める。本研究は、19世紀初めから20世紀までを射程に入れて

ベルリン文学の変遷を捉えようとする試みである。

なお、今回は主としてベルリンが文学の対象となり始めたのち、書籍の形として結実した作品を扱ったが、ベルリンの記述がまだ散発的で、新聞記事や雑誌記事といった形態での発表にとどまり、また、テーマとしてもベルリンの風俗に焦点をあてたものが多かった 19 世紀前半の「小さな形式」による記述が、その後のベルリン文学にとってどのような意味をもっていたかを、今後さらに研究する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kazuko Okamoto	4. 巻 155
2. 論文標題 Briefsammlung als Zeugnis des deutschen Burgertums. Versuch einer Annäherung an Benjamins Deutsche Menschen	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Neue Beiträge zur Germanistik	6. 最初と最後の頁 74-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本和子	4. 巻 80
2. 論文標題 ドイツ近代文学における幼年時代の記述 大都市ベルリンの場合	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 55-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡本和子
2. 発表標題 「ベンヤミン研究における異端？ 反復する自然の力がもつ美しさ（A Heretic in Benjamin Research? The Beauty of the Repetitive Power of Nature）」
3. 学会等名 国際シンポジウム フンボルトコレーク東京2019「神経系人文学と経験美学」，東京大学駒場キャンパス（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----